

柳名賢三全集



椎名麟三全集

9

小説
9

冬
樹
社

椎名麟三全集 9

昭和四十六年十二月二十五日初版第一刷発行

著 者——椎名麟三

発行者——高橋直良

発行所——冬樹社 東京都千代田区神田神保町二一一八

電話東京二六四—〇三四六 振替東京七七五七

印刷所——三容堂印刷株式会社

製本所——一重製本株式会社

装幀者——枡折久美子

写 真——小島啓佑

第九卷目次

長い谷間	3
二階の窓	173
二重殺人	193
半端者の反抗	213
猿の檻	239
媒妁人	261
行き違い	311
我等は死者と共に	343
待っている間の	389
幻想の果て	417
群衆のなかの顔	449

小説
9

長い谷間

1

たすけてくれ！ 私は、自分の声におどろいて、寝床から上半身を起す。アパートのなかは、しんとしずまりかえっていて、外には雨の音が聞えているだけだ。私は、かすかに安堵する。全くこんな恥しい叫び声なんか、誰にも聞かれたくなかったからだ。枕元の目覚し時計を見た。まだ三時だった。店から帰って来て、寝床へ入ってから、まだ一時間ほどこ立っていない。

私はふたたび蒲団のなかにもぐり込んだ。十ワットに切り換えた親子電球のにぶい光が、汚ない古びた部屋をぼんやり照し出している。煤けた天井には、もう数年越しの蜘蛛の巣が、あちこちに不精たらしくぶら下っている。もちろん不精なのは、私の方なのだ。このアパートにだって、年に二回は区役所から大掃除の通知はやって来ていたからだ。しかし私は、一度もそれを行ったことがない。たしかに私は、不精者なのだ。しかしそんなことは、とり立てていうに値することだろうか。

私は、明日のために眠ろうとする。私は、二十六歳になったばかりの、小さなスタンド・バアのバーテンダーなのだ。本店は、両国の方であって、この平井の方の支店は、私にまかされているのである。しかも私は、自分でいうのもおかしいが、責任感のある男なのだ。私は自分の仕事をおろそかにしたことはない。しかも希望だって人並みにちゃんともっている。どこかに小さなスタンド・バアの店をもつことが私の希望なのだ。そのための貯金だって、自分のわずかな給料をさいて毎月ちゃんと積み立てている。それなのに、理由もないのに一年ほど前からあの恥しい考えが、私の脳髓のひだへしみついてしまっているのだ。それは、この地球にもやがて終末がやって来るという考えなのだ。私の終末さえも耐えがたいのに、その上にこの地球がほろんでしまうということにどうして耐えられるだろうか。全くどうしてこの世界が、こんなふうになっているのか、私には全くわけがわからない。しかしまだ結婚もしていない、名もないバーテンダーにすぎない男が、こんな妄想に魅入られているなんていうことは、少女へのいたずらを考えている変質者以上にいやらしい男であることはたしかなのである。全くこんな私は、決して人に知られてはならないことなのだ。

私は、起き上って、机の抽出しをあげ、バラミンをとり出す。薬罐からサイダー・グラスへわずかに水を入れ、そのなかへ大きな白いその錠剤を二個落す。それは水のなかでたちまち崩壊しはじめる。いまのところ私には、この睡眠薬が一番調子がいい。私は、その錠剤のすっかりこわれるのを待って、一気に咽喉へそそぎ込む。だが、いつものようにコップのガラスの壁に、錠剤の残りが、白くざらざらした感じで残っている。私は、そのグラスへふたたび水を入れて丁寧にすすぎ、ふたたびそれを咽喉へそそぎ込む。私だって、こんな恥しい自分に対してはたかかわなくてはならないのだ。

雨が、ますますはげしく降っている。またこのあたりは、水が出るだろう。私は、暗い電燈を見ながら、何かを待っている。やがて私の意識がぐらぐらと揺れはじめ、これで眠れるというやさしげな予感がしはじ

める。朝になりさえすればと私は考える。朝になりさえすれば……。

私は、いつものように九時すぎに眼をさました。私は、自分の部屋を出て、顔を洗いに流しへ行つた。隣の部屋の主婦が、あわてて流し元からはなれた。人に見られてはならないものを洗濯していたらしいのだ。彼女は、底の浅いアルマイトの洗面器のなかへ、そのしぼりの足りない白い布をかくすようにしてもつていた。ズロースらしかった。私は、その布に気がつかない顔で愛想よくいった。

「お早うございます」

私の夜を人々の間にもたらさないこと、それが人々と自分自身に対する責任であつたからだ。だが、彼女は仕方なさそうに答えていたのであつた。

「お早うございます」

それから彼女は、自分の部屋へ逃げるように入つて行つた。彼女は、市田鉄工の労務係長の池田茂雄の妻だつた。まだ若く、私より一つか二つ年上にすぎない。だが、どうしてか彼女はこのアパートの人々の眼から逃げまわっている。威張ろうと思えば威張れるのだ。このアパートには、彼女の夫より社会的な地位の高いものはいないからである。だが、去年の暮の市田鉄工の賃上げストが、少くともこのアパートのなかでは、彼女をひとりぼっちにしてしまつてゐるのだ。このアパートには、彼女の夫を敵側の人間としてたつた市田鉄工の従業員が、五世帯もいたからだ。

私は、顔を洗うと、玄関に近い方の部屋の戸をあけた。その四畳半の部屋には、私の両親がいるのである。つまり私は、二部屋借りてゐるのだ。父は、小さな机の前にきちんと正坐してマッチの箱張りをやつていた。バアの広告マッチのそれで、他のマッチより率がいいのだ。十個張つて、七円になる。父一人で一日に百五

十円は張った。私は、猫背の低い男であるが、父は、やせているが、背が高かった。だから正坐していると、背はしゃんとしているし、なかなか立派だった。父は、私鉄の運転手だった。一時は、組合の役員になり、私鉄の全国大会で、議長団の一人にえらばれたことさえあった。しかし昭和二十五年のレッド・パージで職を失ってから、保険の外交やら倉庫の番人をやったりしていたが、いずれも長つづきはしなかった。そして五年前、私たちはこのアパートへやって来たのだが、人間的にも父はすっかり覇氣を失ってしまったようだった。父は、一日中部屋へとじこもっていて、外にさえあまり出なかった。また、誰一人、彼をたずねて来る者もなくなっていた。私は、去年このアパートに一部屋空いたのを幸いに、その父から独立したのである。私は、両親にさえ私の恥しい秘密を知られたくなかったからだ。——父の張ったマッチを墓座の上へひろげていた母は、私を見ると、急いでせまい台所へ立った。

「今朝、数枝さんが来たよ」と母はいった。「へんな帽子をかぶっていたよ」

「ベレー帽だろ」と私は答えた。「昨日、店へも来やがったんだ」

父は、ただだまって、馴れた手付きでマッチの箱を張りつづけていた。父には、もう彼自身の意見さえもつことはできなくなっていた。その五分划の頭は、まだ五十にもならないのに、ほとんど白くなっていた。母はいった。

「味噌汁とおしんこだけけど、いいだろ？」

私は、自分の部屋へかえった。母は、追っかけるようにして食事を私の部屋へ運んで来た。私は、その母へ千円札を三枚わたした。私は、一月九千円、両親へわたすことにしていたのだ。もちろん私の賄料をふくめてだ。しかも私は別に一月に一万円は、銀行へ積み立てていた。数枝が昨夜店へあらわれたのは、そのことを知っていたからだ。つまり彼女は、またもや私に金を借りに来たのである。だが、私には、彼女へ金を

貸してやる義理はなかった。彼女は、私が両国の本店で、パーテンダーの見習をやっているとき、よくその店へひとりで飲みに来た女だった。身体つきのずんぐりしている見栄えのしない女で、店の私たちの仲間からも毛嫌いされていた。妙に気どったところがあり、いつもむつかしげな本を小脇にかかえていたからである。だが、彼女は、私たちの店の名前の「あかつき」を漢字で書けなかったのだ。もちろん私たちは——パーテンダーは見習の私を入れて三人いたのだが——その彼女を笑いもしなかった。彼女が、錦糸町の支那そば屋の女店員であることを知っていたからだ。だが、彼女は、そんなことも知らないで、神田の出版社につとめているといていた。彼女に、そんな嘘のつづけられたのは、マスターが、彼女の素性をばらすことを私たちに禁じたからだ。マスターは私より一つ年下の二十五だったが、商売熱心の真面目な男で、六年ほどで、本店を改築して大きくしただけでなく、平井へいまの支店を出したくらいだった。まだ、独身で、銀座へ店を出すまでは結婚しないつもりのもりのようであった。私は、このマスターを愛していた。だが、このマスターさえ、私が数枝と一緒にになったことも、また一月もたたないあいだに彼女が私から去って行ったことも、いまだに理解できないのである。しかしそんなことはどうでもいいことなのだ。ただ彼女は、私に満足できなかったというだけからだ。

だが、昨夜、降りはじめた雨のなかを店へやって来た数枝は、全く悄然としていた。風のたよりに彼女が、やっとほんとに出版社へつとめていると聞いてはいたが、その出版社がつぶれてしまったというのだ。その彼女は、まるで画描きのような恰好をしていた。赤いベレー帽をかぶり、スケッチ・ブックのようなものさえもっていたからである。そして自分は、いま画をならっているのだといって、私の知らない、しかし有名ならしい人の名前を彼女の知合いとしてならべ立てた。

「君は、何のために画なんか知らないはじめたんだ」と私はたずねた。

すると彼女の隣に腰を下していた客が、その彼女へとりなした。

「パーテンさん、画というものは、何のためにやるものじゃないんだよ」

数枝は、得意そうな顔になって、その客とビールで乾杯した。私は、私と一緒にその支店をやっているマスターの従妹の栄子へいった。

「あの女のお客さんへ出したビール、ちゃんと伝票へついているね？」

栄子は、私を意味ありげに見ながら、にっと笑った。それからカウンターのかけへ背をまるめながら、伝票へビールを記入した。彼女は、私が数枝からまたもや金をしぼられるにちがいないということを知っていたのだった。

雨はもうやんでいたが、通りには案の定水が出ていた。私は、ゴム長をはいて、その水のなかを歩いて行った。そして駅への通りを店の方へ曲ろうとしたとき、角の煙草屋の老婆が、私へ声をかけた。

「大塚さん、ちょっと雨が降ると、すぐこれなんだからね」

私は、ぺこりと頭をさげながら愛想よくいった。

「いや、全くですよ」

老婆は、それへ答えた。

「ほんとにねえ」

水は、そのあたりの舗道の上にも、十四、五センチの深さで蔽っていた。それは動きさえ見せず、あるひろびろした感じを街のなかへあたえていた。だが、ブリキの金だらいを浮べながら遊んでいる子供たちも通行人たちもこんな水には馴れ切っている感じだ。街の家並の間から駅舎の黒い屋根が見えた。高架の駅だか

らだ。それらの屋根の上に、まだくもっている空が重そうに垂れている。といって、全く何ということもないのだ。自転車が、私を追い抜いて行った。重そうに水を切って行くその後輪のタイヤが、力なく水を後へふりとばしていた。やがてそれでも水は切れ、そこからアスファルトの黒い舗道が這い上っていた。そしてその水際だけ、水はかすかな動きを見せて、さざなみさえ打っていた。板や藁くずが、小さく揺れ、まるで水が呼吸でもしているようだった。

店の前に、数枝が立っていた。時計を見た。十時半だった。約束におくれたわけではなかったのだ。彼女は、細いチェック縞のビニールのレインコートを着ていて、昨日と同じ赤いベレー帽をかむっていた。そのベレー帽は、顔の丸い彼女には、どうも似合わない感じた。彼女は私を見るといった。

「朝、ちょっとあんたのアパートへ寄ったのよ。お金、もって来てくれた？」

私は、上衣のポケットからハトロンの封筒をとり出した。彼女は、それを受取ると、その封筒の表に書かれた五千円という数字を見ながらひるんだ笑いを見せた。

「相変らずちゃんとしてるわね」

「そうだよ、ちゃんとしているよ」

「ほんととは、わたし、昨日話した部屋代や借金のほかに、もう少しいるんだけど」

「だめだよ」と私はいった。

私は、店のドアの鍵をあけてなかへ入った。なかは、真暗でしめっぽい。私は、カウンターのなかへ入り、電燈のスイッチを入れた。数枝は、高い椅子へよじ上るようにして腰を下し、カウンターへ肘をついた。

「ほんとに、わたし……」と彼女はいった。

私は、ふたたびにもなく繰り返した。

「だめだよ」

数枝は、ふたたびひるんだ笑いを見せた。

「ほんとにだめ？」

「おれは真面目に働いてるんだ」と私は思わずはげしくいった。「真面目に一生懸命働いているんだ。君のように、芸術だ、何だかんだといいながら、のらくら遊んでいる人間じゃないんだ。それに君にはわからないだろうが、おれの金には血がにじんでいるんだ」

「血がにじんでいる？」と彼女は皮肉な笑いをうかべた。

「そうだよ」と私は断乎として答えた。

全く血がにじんでいるということには実感があつたのだ。しかし私は、夜の秘密にはふれることはできなかった。で私はふたたび繰り返すより仕方がなかった。

「つまり真面目に働いて得た金なんだ」

「真面目に働いたって、こんな店で何になるの？」と彼女はいった。

「君には、そんなこという権利はないよ」

数枝は、二つに折った封筒を無意味にひらいて見た。

「そうね」と彼女は、話題でもかえるように軽く受け流した。「わたし、コーヒー飲もうかしら」

「もう三十分たないと出来やしないよ」

次の瞬間、数枝は、はっとしたように入口の方を見た。外光を背に負うようにして一人の女が入って来たからだった。最近ときどき飲みに来る植田敬子という四十すぎの未亡人であった。彼女は、数枝を見ると、とまどったようにカウンターの端にたたずんだ。私は、愛想よくいった。

「植田さん、いま、店をあけたばかりなんですが」

「そうらしいわね」と彼女は遠慮した声でいった。「でも、こんなに早く店をあけているとは知らなかったわ」

「昼間は、十一時から一応喫茶をやることになっているんですよ」

「そう」と敬子は気にもとめない声で答えた。「あのね、岩本さんが、今日、わたしへ絵をもって来て下さるというのよ。それでね、受取っておいてほしいのよ」

「岩本さんですね」

「そうよ」と彼女は、親しさをこめていった。「ちょっと姉の家へ行こうと思ってここを通りかかったら、店があいていたのでちょっとよって見たのよ」

敬子は、ハンドバッグから煙草を出して火をつけた。それから煙草をキセルをもつようなつまみ方でもちながら吸いはじめたが、すぐ灰皿へ押しつけるようにして消した。どうやら彼女は、とまどっているらしいのだ。彼女は、煙草の箱をハンドバッグのなかへ戻してパチンとしめると、やっといった。

「それじゃ、お願いね」

もちろん私は愛想よく答えた。

「はい、承知しました」

敬子は、いかにものんびりした様子で表へ出て行った。数枝は、不機嫌にいった。

「何よ、あの女！ とりすまして！ ブルジョア女じゃないの！ わたし、あんな女、きらいよ」

私は、だまっていた。数枝のブルジョアという言葉をつかつての決めつけ方が不快だからであった。すると数枝はいった。

「じゃ、わたしも帰るわ」

私は、その数枝へいった。

「とにかく汗水をながして働くんだよ。世のなかは、君の考えているようにあまくはないんだよ」

数枝は、瞬間、軽蔑したような笑いをうかべた。もちろん私の忠告が、老人くさい平凡きわまるものであることを笑ったのだ。彼女は、そのまま後も見ずに表へ出て行つた。重い入口のガラス戸が、彼女の後でバタンと鳴つた。私は、カウンターをふきはじめた。仕事を一つおえた感じだった。

『ブルジョアか、全くあいつは、きいたことをいいやがるな』と私は呟いた。

たしかにあの未亡人は、数枝のいうようにブルジョア女だった。彼女は、市田鉄工の前の副社長の娘だったからである。彼女は、千葉の方の銀行家へ嫁に行つていたのだが、数年前夫に死なれ、一度は千葉で洋裁店のようなものをやつていたらしいのだが、最近ふたびこの近くの実家へ帰つて来ていたのだ。全くその彼女の素姓は、店へ来る客の間では実にはつきりしていた。だが、どういうわけか、彼女に初対面の客は、彼女の方をひそかに眺めながらささやくようにこうたずねるのだった。

「あの女は、一体、どういう素姓の女なんだい？」

もちろんときには、こんなささやきが敬子の耳に入るときもあった。しかし彼女は、平気な顔でとりすましていた。そしてこの店へやつて来る客のうちには、市田鉄工の工具も多いのだが、それらの工具の御馳走になるばかりか、ときにはここから他のバアへ工員たちの後へついて行くこともあった。そして誰かが彼女を金持と呼ぶと、彼女は真顔で答えるのだった。

「わたし、貧乏なのよ、ほんとよ。ただ、食べる方は、心配ないというだけ。それも食事の時間になると、だまって食堂へ行つてすわっているからよ。すると兄嫁も食べさせないというわけには行かないでしょ。た